

出家

—それをとめる側の論理—

井 手 恒 雄

一

古川柳の次の句が、わたしの興味をひく。日本古典文芸研究上の重要課題である出家の問題に関して、重要な示唆を与える一句であると思われるからである。

里の母髪を切るなとそつといひ

(『誹風柳多留』五篇)

これは、一人の女が夫に死なれたことである。かきつけた実家の母親が娘を物かげに呼んで、ひそかに「髪を切るんじゃないよ」ととめている、というのである。夫に死なれた女が髪を切って尼になるのは、古来の習俗である。その習俗を念頭に置いて味わうと、おもしろくもあり、哀れでもある句である。

この句は、次のような句と並べてみると、一層よくその気持ちがわかる。

世を捨てぬのでなんのかの後家いはれ

(『柳籠裏』)

これは、夫の死後尼にもならず平気である、というので、未亡人が人から悪く言われる、というのである。今日「後家」などは使用したくない語であり、「未亡人」も考えてみれば変な語であるが、ここはそれどころではない。夫に死なれた女はもはや一箇の人格としては認められず、仏門に入って死んだも同然の存在になるのが、当時としては当たりまえであったのである。

これらの古川柳の作品がいわゆる出家の問題に関して重要な示唆を与えるというのは、こうである——。

どういふわけか、いわゆる国文学者のあいだには、過去の社会における出家を現代人の立場で理想視する人が多く、その結果古歌の、まだ自分は出家できずにいる——、というたぐいの哀れな詠嘆が、真実哀れなものとして感得されず、ただ未熟なものとしてしか受けとられないのは、遺憾なことではあるまいか。われわれはその種の詠歎を、殊勝とか未熟とかいふ価値観においてでなく、これこそ人間の真実と見る立場で、正しくとらえることを学ばねばならないのではあるまいか。夫に死なれた女が尼になることを当然とする過去の日本人の常識は、例の「貞女は二夫に見えず」の教義によって裏付けられて、ながいあいだ維持されてきたが、われわれは、そういう過去の教義なり常識なりから解放された所で、古人の本音を読み取ることができなければならぬのではないか。総じて出家の事実につきましてではなく、それをとめる側に立って味わうことを学ばねばならないのではないか。

「貞女は二夫に見えず」といえば、平家物語巻第九の「小宰相」の話が連想される。平通盛の北の方小宰相は、一の谷の合戦で討たれた夫のあとを追うて、屋島へ渡る船から海中に身を投じたが、作者はこれについて、「昔より様を替ふるは常の習ひ、身を投ぐるまでは有り難き例なり。されば忠臣は二君に仕へず、貞女は二夫に見えずと

も、かやうの事をや申すべき」と言う。作者は、「貞女は二夫に見えず」の教義を讚美するものようであるが、小宰相の入水に先立って乳母の女房にそれをおしとどめさせることを忘れない。尼になるどころか身をさえ投げる、戦乱の世の一女性の悲劇は、それをおしとどめる側の立場に立って語ることによって、真実悲劇たり得ていると思うのである。

さて、古歌の具体的な例をあげると——、

いづくとも身をやるかたの知られねば憂しと見つとも
ながらふるかな

かずならぬ心に身をばまかせねば身にしたがふは心な
りけり

心だにいかなる身にかかなふらん思ひしれどもおもひ
しられず

三首とも、『紫式部集』に見える歌であるが、いずれも夫藤原宣孝に先立たれた紫式部が、世を捨てようとして捨てかねる歎きを詠んだものである。こういうものをわれわれはどう理解すべきであろうか。世を捨てることを当然とする立場から見ると、それをとめる側から見るとでは、これらの歌の受けとり方がどうちがってくるというのであろうか。

はじめの一首は、どこへといつてわが身の持つて行きよ
うもないので、この世を憂き世とは観じながら、いつまで
も出家もせずにいることよ——、というのである。憂しと
見つつも、すなわち、この世を憂き世と観じながら、とい
うのは、どういうことであろうか。それは、仏の教えに従
つてこの人生を憂きものと見ながら、ということである。
この人生を憂きものと見るのは、彼女自身というよりも仏
教そのものである。この世を憂き世と観じて世を捨てよ、
という教えが、あたかも「貞女は二夫に見えず」のそれの
ように、彼女に尼になることを迫つたのである。彼女は、
それはわかつていながらできない、と言うのである。この
世を憂き世と観じて世を捨てよ、という教えが「貞女は二
夫に見えず」と同様、むごいものであり、所詮は一箇の支
配的イデオロギーであり、それがまた彼女の歌の哀切さを
生む所以であることは、世を捨てることをとめる側の立場
に立つて、はじめてわかることではあるまいか。

次の一首は、わたしのつたない心ではわが身を思いどお
りにできないので、心では世を捨てたいと思ひながら、わ
が身に支配されるままに、世を捨てきれないでいる——、
というのである。この一首など、世を捨てることをとめる
側から、「尼になることができないなら、そのままであら
っしやいよ」という暖かい気持ちで接して、はじめてその
気持ちが生きて伝わるというものはあるまいか。

次の一首は、わたしの心の世を捨てたいと思う願ひは、
どんなわが身だつたらかなえられるのであろうか。無常を
観じて出家すべきだということとはわたしの心にはわかつて
いながら、今のつたないわが身にはそれがわからない——、
である。「心」と「身」との葛藤としてよまれた、いささ
か言語遊戯のような感じのしなないでもないこの一首の真意
も、出家というものを元来無理なものとしてとめる側から
は、理解できるのではあるまいか。出家を躊躇する気持ち
を「心」と「身」との葛藤としてとらえることについて
は、最後に述べる。

出家を無理なもの、不合理なものとしておしとめるとい
つても、それは古川柳の時代のことではないか、と言われ
るかもしれないが、次のような例が見られる。

尼にならむと思ひ立ちけるを、人のとどめ侍りけれ

ば
和泉式部

かくばかり憂きを忍びてながらへばこれよりまさるも
のをこそおもへ
(新古今集・雑下一八一)

古くから、出家をとめる人はあつたのである。われわれ
は、過去における出家の事実を、それをとめる人の側から
哀れと受けとめることを知らず、逆にそれを当然とする人
の側から殊勝と讃えがちであるが、この一首の場合は、出

家遁世を決行する人もそれをとめる人も、気持ちは同じであつたのである。出家を決行するからといって、それは殊勝よと賞讃すべき性質のことからではなかつたのである。和泉式部の場合、決して求道の一筋に生きるというようなことではなかつたのである。この世にとどまっていれば一層の気苦労をするであろう、というその気苦労が具体的にどんなものであつたかは明らかでないが、とめる人にはそれがわかつていたはずである。それは決して、出家する人の気持ちは、それをとめる人にはわからない、というようなことではなく、その逆であつたと思われる。とめる人を啞然、呆然とさせる出家もある。それについては、後に述べる。

出家する人も、それをとめる人も、同じ心で歎いたであろうと思われこの一首のごときものを、出家を無理なもの、不合理なものとしてとめる立場に立つて味わうことから、われわれの出家に関する論議は始めるべきではないかと思うのである。

二

夫に死なれた女が尼になる話から始めたが、男が官職の不满から出家する場合なども同様に、これを出家を無理なもの、不合理なものとする立場から見ること、われわれ

は慣れるべきではあるまいか。

つかさ
官解けて侍りけるときよめる

平 貞文

うき世には門させりとも見えなくになどかわが身の出でがてにする
(古今集・雑下九六四)

この憂き世には門があつてそれが閉ざされているとも思われぬのだが、どうしてわたしはこの世からのがれることができないのだろう——、というのである。不満を抑えきれず、思い切つて出家しようと思ひながら、それができないでいる、というところに、世に容れられない男の哀れさがある。かつて過去の日本の社会では、官職の不满がある場合出家するのが当然のこととして自他ともに認められていたことを知り、そしてそれが所詮無理なもの、不合理なものであつた歴史上の事実を知つて、はじめて理解できる歌である。

官職の不满がある場合出家するのが当然とされたことを知る好い例として、次のようなものがある。

まず平家物語に見える、徳大寺大納言実定卿に関する記事である。当然左大将になるべき実定卿であつたが、当時の叙位除目は平家の思うままであつたので、平家の嫡男重盛がその地位に着き、実定卿は二男宗盛にさえ位階を追い

越される。世間では、実定卿の出家を期待する。いわく、「中にも徳大寺殿は、一の大納言にて、華族英雄、才覚優長、家嫡にてましましけるが、平家の次男宗盛卿に階越えられ給ひぬるこそ、遺恨の次第なれ。定めて御出家などもやあらんと、人々ささやきはれけれども、徳大寺殿は、暫く世のならん様を見んとて、大納言を辞して籠居とぞ聞えし。」（『平家物語』巻第二）と。世間では、実定卿の出家を期待するが、実定卿自身は躊躇する。出家がそれほど容易なものではないことが知られて、おもしろい。

やがて実定卿は出家に踏み切ろうとするが、藤藏人大夫重兼にさえぎられる。重兼は、「諸事に心得たる人」と記されているが、その重兼が出家をとめるのである。実定卿は言う。「つらつら平家の繁昌する有様を見るに、嫡子重盛、次男宗盛、左右の大将なり。やがて三男知盛、嫡孫維盛もあるぞかし。かれもこれも次第にならば、他家の人々は、いつ大将に当りつくべしとも覚えぬ。されば終の事なり。出家せん」と。重兼が言う。「君の御出家候はば、御内の上下皆惑ひ者となり候ひなんず云々」と。重兼は一策を案じ、有名な「徳大寺殿島詣」となるのである。すなわち、実定卿は平家の尊崇する安芸の殿島神社に詣でて平清盛の歓心を買ひ、首尾よく左大将の地位を手に入れるのであるが、いずれにせよ平家物語における実定卿の一件は、習俗としての出家というものの現実を示すものとし

て、注目すべきものであると思うのである。

次は栄華物語に見える、藤原伊周の臨終における、妻子に対するあわれな遺言である。有名な場面であるが、伊周は、年少のわが子道雅に対し、次のように言う。「いでや、世にありわづらひ、『官位人よりは短し、人と等しくならん』など思ひて、世に従ひ、物覚えぬ追従をなし、名簿うちなどせば、世に片時あり廻らせじとす。その定ならば、ただ出家して山林に入りぬべきぞ」と。わが亡きあと、官位の昇進が思わしくなく、そのため人にこびへつらうくらいなら、ただ出家せよ——、という、父親の語は、恐ろしいほどの執念を見せているが、われわれは、ここにも古代における出家の現実を見ることができると思うのである。

普通に出家というと、求道一筋の崇高な行為と考えられがちであるが、出家の現実には、存外にも人間臭いものであったのである。伊周の語がそれを物語っている。望みがかなわなかったら出家せよ、というところには、自棄としか思われぬものがあるが、伊周は北の方にむかって、娘たちのことを次のように言うのである。まず、いわく、「おのれ亡くなりなば、いかなるふるまいどもをかし給はんずらん。世の中に侍りつるかぎりには、とありともかかきりとも、女御・后と見奉らぬやうはあるべきにあらずと思ひとりて、かしづき奉りつるに、命堪へずなりぬれば、いかが

し給はんとする云々」と。自分が生きていくかぎり、何としてでも娘たちを女御・后にしないではおかないと、野望を燃やしてきた伊周であったが、臨終の床にあってはもはやどうすることもできない。北の方に向かって愚痴を言うよりほかない。伊周としては、女御・后になりそこなつた娘たちが、つまらぬ男の妻となつて平凡な一生を過ごすなど、考えただけでもたまらない。それにしても、伊周の次の語は、すさまじい。伊周はつづいていわく、「なごて世にありつる折、神仏にも、『己おのがある折、先に立て給へ』と、祈り請はざりつらんと思ふが悔しきこと。さりて、尼になし奉らんとすれば、人ぎき物狂しきものから、あやしの法師の具どもになり給はんずかし。あはれに悲しきわざかな。まろが死なん後、人笑はれに人の思ふばかりのふるまひ有様掟て給はば、必ず恨みきこえんとす。ゆめゆめまろがなからん世の面伏せ、まろを人にいひ笑はせ給ふなよ」と。伊周は、どうして自分はこれまで神や仏にも、「わたしが生きていくうちに、娘たちの命をお召しください」と、祈り願わなかつたのであろう、と、後悔される、と言う。最後に考えられることは、娘たちを出家させることであるが、そうすると娘たちは、みすばらしい法師たちの妻になつてしまふであらう——、それも悲しい、と言う。すべてにつけて、自分が死んだのち、人の物笑いの種にしてくれるな、という気持ち根底にあり、親のエゴも

いいところであるが、いずれにせよ、古代における出家の現実として、こうして一方的に「尼になし奉らん」とする、強制的な出家があり、かりに尼になつたとしても、彼女たちは名もなき法師の妻になつてしまふであらうと予想される、みじめな事実があつたということは、見過ごされてはなるまい。

こういふ、過去の出家の現実が、前掲の平貞文の「などがわが身の出でがてにする」というたぐいの、より現実的な詠歎を生んだ真実を、われわれは見届けるべきであると思うのであるが、今日においても過去の出家を、そういう低次元のものとは考えたくないという人が、少なくないと思う。殊勝な出家、決然たる出家とされるものについて、見てみたい。

女の出家は、並たいていのことではないことが、前記の伊周のことばから察せられたが、たとえば『発心集』の「上東門院女房住深山事」などを見ると、女房が出家して山奥に身を隠した稀有の出来事が語られている。ある聖が深山を尋ね歩いたときのこと、北丹波の山奥で、形ばかりの柴の庵を並べて、衰え果てた尼二人が殊勝な有様で住んでいた。末法の世にもこのような人があるかと感動した聖が、その素姓を問うたが、尼は返答しようとしなない。聖が恨んで、自分も世を遁れ、身を捨てて、山林に迷い歩く身であるが、女の出家は困難である、それを決行された

のは世にもまれなことである、わが身をはげますためにも、ぜひお話が承りたい、と言う。尼ははじめて口を開いて、身の上を語る。尼たちはもと上東門院の女房であったが、世の無常を觀じて世間のことに興味を失い、恵まれた環境の下で俗世間の楽しみにふけることが何かにつけて心苦しく思われるままに、二人申し合わせて、邸を立ち去った。この山奥に跡をとめて、はや四十年。当初は嵐のはげしさ、鳥獸の恐ろしさに堪え忍ぶべくもなかったが、今は生活にも馴れ、念仏に明け暮れている——、と言う。聖は感涙にむせび、極楽浄土での再会を約束して帰る。その後、衣服食料などを用意してふたたび訪れると、草庵はそのまま、尼たちは姿を消していた。

『発心集』の編者は、「女の身にてかかるすまひ思ひ立ちけん、おぼろげの道心にはあらざるべし云々」と感激するが、これはどうであろうか。こういうことがあり得たであろうか。どうもこの一説話は作り話のような気がするが、かりに実際あった話であるとしよう。二人の女があらゆる危険に堪えて、（危険といえ、この聖の訪問自体が道心を妨げるものとして拒否すべきものであり、それゆえに彼女たちは行くえをくらませたのであるが）、修行することの意味は、どこにあったのであろうか。こういう出家は、少なくともすぐれた詩歌を生み出す地盤ではあり得なかった。彼女たちは殊勝ではあったが、別に和歌の形をかりて吐露すべき

内心の矛盾はなかった。いずれにしてもわれわれはこの場合も、彼女たちを殊勝と讃える立場からではなく、それを危惧する立場から、検討する必要があるのではあるまいか。

また同じ『発心集』に、「齋所権介成清し子住む高野二事」というのがある。尾張の住人、齋所権介成清という者の嫡子が決然として出家する話である。成清の子が出家を思い立ったのは、父母に連れられて東大寺の大仏供養を見てのことである。かれらの発心は単に「さるべきにやありけん、心の中につよく道心おこ発して」と語られるだけであるが、そういうほとんど動機という動機のない発心は当時格別尊重されたものようである。前に述べた、官職の不満などからの出家に比べて、次元の高いものだと考えられたものようである。すなわち成清の子は、大仏供養の場で「いかで身をなきものになして思ふさまに仏道を修行してしがな」と思ったが、父母は許さない。一度帰郷して、その後父母には黙って家を出、大仏の上人（俊乗坊重源）に会い、出家の意志を告げる。上人の「誰人ぞ。いかなる事によりて世を遁れんとは思ひ立たれたるぞ。年も若くいます。あやしく」という問に対し、成清の子は、すべてに恵まれた身で理由らしい理由はないが、と前置きして、ただ身命を投げうって仏道に入りたいと思う旨を答える。それに対して上人は、次のように感歎の語を発するのである。

いわく、「いといと有難きことなり。此等に弟子と名付けたる聖、その数侍れど、すずろに世を捨てたる人はなし。或は主君のかしこまりを蒙り、或は世のすぎがたきを愁へ、或は悲しき妻におくれ、或はつかまくらゐ司位につけて世をうらみなど、様々心になはぬを、其の次としてのみこそ世を捨つる習ひにて侍れば、其の事忘れなん後は道心もあやふく侍るを、聞くがごとくならば、発心にこそ。仏も必ず哀れと悲しみ給ふらめ。いといと有難きことなり」と。ほとんど動機という動機のない出家、理由らしい理由のない発心を、例の兼好法師も『徒然草』（第五段）で賞揚しているが、ここで上人はそれを「すずろに世を捨て」と言い、「発心にこそ」（これこそ真実の発心よ）と、いたく感じ入るのである。

この話は、現代人のなかにもいたく感じ入る人があると思われるが、わたしはこれは次のように見るべきであると思う。それはすなわち、この一見決然たる出家を、これをとめる立場から眺めて、その意味を考えてみることである。そういう見方考え方は、案外にも今日行われていないと思うのであるが。

成清の子の出走は、郷里の家族には大きな衝撃を与えた。「父母妻子ども皆肝心をまどはし、当国隣国いたらぬ隈なく、足手を分かちつつ尋ね求むれど、いづくにか在らん。たとひ命尽きて空しき骸からと成りたりとも、今一度其

の形を見んと歎き悲しむ様、ことわりにも過ぎたり。はては国のうちゆすりみちて、見聞人涙を落とさぬは無かりけり」という。こうして驚き歎く家族の立場から出家というものを見ることを、われわれは学ぶべきではあるまいか。そうでないとわれわれは、決然と出家する人の心理は理解し得ても、父母妻子の恩愛にとらわれて出家もままならぬ人の真情は、ついにこれを汲みとることができないということになってしまふのではあるまいか。いわゆる決然たる出家の決然たるところに酔うだけの、文芸の論ともいえぬ文芸の論は、再考を要すると思うのである。実際、成清の子の出家はまことに決然たるものがあり、それはまさに恩愛の介在を許さぬものであり、それはまた「文芸」の存在を許さぬものであった。というのはこうである。われわれは、たとえば次のような和歌が古来佳作として人々に愛誦されたことを知っている。

遍 昭

たちねはかかれとてしもうば玉のわが黒髪をなですやありけむ
(後撰集雑四)

剃髪に際して母の愛育を思う出家者の感懐は哀れであるが、この場合成清の子という人は、そのような哀れな感懐とか「文芸」とかいうものには無縁の存在であったよう

ある。われわれはそういう非文芸的な立場に立つてではなく、逆に文芸的な立場に立つて物を考えなければならぬと思うのである。

成清の子は、やっとの思いで尋ねてきた父母と妻とを追い返す。変わり果てたわが子を見て、泣く泣く翻意を願う両親に向かつて、成清の子は言う。いわく、「此の山へ罷り入りしとき、また帰り出でじと思ひかため侍りしかど、暇を申さずして家を出で侍りし事の、罪さがたくて、また立ち戻り候ひつれども、あらぬ心にて、かく出で侍るなり。今より後は、たとひ御尋ね候とも、いささかも是まで出づること仕るまじ。されば、今は是ばかりなむ限りにて侍るべし。我を見まほしくおぼさば、心を発して仏道をねがひ給へ。此の世にては、たとひ思ふばかりそひ奉りたりとも、いつまでか見奉らん。我も人も、おくれ先立つならひ遁れがたければ、せんなく侍るべし」と。成清の子は、實際一徹である。まことに、決然たる出家は、人を啞然、茫然たらしめるものなのである。問題は、われわれは文芸の本質的なものをどこに求めるべきかであるが、人によってはここに見られる成清の子の意志の強さ、無常世界からの断固たる超絶などと呼ばれる行為に、それを求めるべきであると言うであろう。前述の『発心集』「上東門院女房住深山事」に「あだなる残りの命をたのまず、離れやすき恩愛のきづなにつながらずして、此のたび頭燃を払ふが

如くして、喉のかはけるに水をのむが如くにねがふべし」と言うが、成清の文字どおり「恩愛のきづな」につながらない在り方に、今日憧憬のようなものを感じる人がある。しかしわたしが思うに、文芸の本質的なものは、断固恩愛を断つというようなところではなく、その反対のところを求めるべきではないか。成清の子のかたくな態度に、物かげから夫をのぞき見していた妻は泣きぐずれ、父母も悲しみが増し泣く泣く帰途についていたというが、その妻なり父母なりの立場からこの出家の出来事を考えることは、これまでほとんど行なわれていないようである。それを今新たに行なうべきではないかと思うのである。

三

出家というものを、それをとめる側の論理、それを無理なもの、不合理なものと考え、側の論理で考えると、どうなるか。

それは、早い話が和歌の解釈に関してこういうことになると思う。たとえば――。

山の法師のもとへ遣はしける 凡河内躬恒

世を捨てて山に入る人山にてもなほ憂きときはいづち

ゆくらむ

(古今集・雑下九五六)

この世を憂き世と観じて山に入る人は、その山でもつらいときは、さらにどこへ行くのであろう——。

これは、この世を憂き世と観じて出家することをよしとする当時の風潮に対する批判であり、こういう和歌があったというだけで価値のあるものであると思われる。これは、次のような、無常を観じて世を遁れようという歌に対して、格別の意味を持つと思われるのである。

み吉野の山のあなたに宿もがな世の憂きときのかくれがにせむ
(古今集・雑下九五〇)

世にふれば憂きこそまされみ吉野の岩の懸道かけみちふみならしてむ
(同 九五二)

あしひきの山のまにまにかくれなむ憂き世の中はあるかひもなし
(同 九五三)

世の中の憂けくにあきぬ奥山の木の葉に降れるゆきや消なまし
(同 九五四)

右は、いずれもよみ人しらずの歌で、古今集雑下にまとめられたものである。

はじめの「み吉野の」の一首は、吉野山のそのもつと奥に住む家があればいいのだがなあ、この世がつらいときの隠れ家にしよう——。次の「世にふれば」は、この世に生

きているとつらいことばかり多くなる、吉野山のけわしい山道を踏みしめて世をのがれよう——。次の「あしひきの」は、どこでもいいから適当な山を求めて身を隠したい、このつらい世の中は生きていくかいないか——。「世の中の」は、このよのつらさはもういやというほど味わいつくした。奥山の木の葉につもる雪の消えるように、わたしも人知れぬ所に身を消してしまいたい——。これらがいずれも世をのがれたいと言っているのに対して、躬恒の「世を捨てて」の一首は、軽妙な言い方で、そのつらい世の中に生きてゆくのが人間だ、と教えている。それが格別の意味を持つことは、読者自身が出家をとめる側、それを無理なもの不合理なものとする側に身を置いてはじめて、理解することができると思うのである。

右に掲げた「み吉野の」以下の歌群のなかに、次の問題歌がある。

いかならむ巖いははのなかに住まばかは世の憂きことのきこえこぎらむ
(古今集・雑下九五二)

これもよみ人しらずの歌である。問題歌と言ったのは、この歌には古来、「かは」を詠嘆をこめた疑問と見て「どんな岩屋のなかに住んだら、世間の厭な話が聞こえて来ないのだろうか。わたしはそういう所を求めて世をのがれた

い」ととる説と、「かは」を反語ととって「どんな岩屋のなかに住んだら世間の厭な話が聞こえて来ないのだろうか。そんなところは実際にはないのだから、やはりわれわれは憂き世に生きて行かなければならないのだ」とする説とがあつて、そのいずれが正しいかはいまだに決着を見ないからのことである。わたしが思うに、これは後者が正しいのではあるまいか。両説が相対立する今日、その是非を決定するのは、どういう視点に立つかだけになるが、この場合古人の求道の心を自分の心とする視点から、この一首をあくまで憂き世を離れて平安の境地を求める気持ちと解するより、当時の人々も出家というものに対し若干の疑念を抱いたであろうとする視点から、これを俗世を捨てて山に住むことへの懐疑ととる方が、より適切ではないかと思うのである。

次のような和歌の場合は、どうであろうか。

題知らず

法印幸清

世を厭ふ吉野の奥のよぶこ鳥ふかき心のほどやしらん
(新古今集雜上一四七五)

俗世間を遁れて隠れ住む吉野の奥の呼子鳥よ。お前はわたしの心の深さを知ってくれるであろう——。

これを、『完本新古今和歌集』(窪田空穂)に、「呼子鳥。

『呼ぶ』は掛詞で、われを呼ぶ呼子鳥よ。」「深き心の。『深き』は、世を厭う心の深きで、初句との関係で現わしている」と言い、さらに「〔評〕世を厭う心を抱いて、吉野の奥に住もうと思つて入つた時、そこにいる呼子鳥の鳴き声を耳にして、こうしたところに住んでいる鳥とて、世を厭う心を解していることだろうかと思つた心である。呼子鳥を擬人したものではあるが、仏説では鳥獸草子も人間と同根のものとしているから、感傷の意味での擬人というだけではない。」と言うが、これはどうであろうか。

一体、この一首における「深き心」とは何であろうか。そしてまた「呼子鳥」は何のために取り上げられたのであろうか。わたしが思うに、この「深き心」はいわゆる求道の心の深さではなく、逆に恩愛を断とうとして断ち得ないでいる遁世者の哀れ深さではあるだろうか。そして「呼子鳥」は「われを呼ぶ呼子鳥」ではなく、「わが子を呼ぶ」という名の呼子鳥」ではあるまいか。いとし子を捨てて遁世したわたしの、いまなおわが子を思う心の哀れ深さを、わが子を呼んでなくという名の呼子鳥は知ってくれるのではあるまいか——、というのではあるまいか。以上のような解釈を、わたしは諸注のなかに見いだすことができないのであるが。

『新古今和歌集全評釈』(久保田淳)にも、「ふかき心のほどやしらん——わたしが世を厭う心の深い程度を知ってい

るのであろうか。『ふかき心』は『世をいとふ』ことが深い心の意だが、『おく』の縁でいう」と言い、一首を「吉野山の奥に分け入った人が、自身を呼んでいるような、淋しい喚子鳥の声を聞いた時の心である」と言うが、そうであらうか。一体、どうして「呼子鳥」が「自身」を呼んでいることになるのであろうか。「われを呼子鳥」とでもあ
るのなら、いざ知らず。「呼子鳥」は、わが子を呼んで鳴くから「呼子鳥」ではないであらうか。また、かりに「呼子鳥」が歌の主人公を呼んでいるとして、その「呼子鳥」が知ってくれるのは、はたして「世を厭う心の深い程度」であらうか。これが、出家というものを無理なもの、不合理なものとする側からの発想であらうが、この「深き心のほど」は早く言えば出家者の悩みであり、内心の葛藤であるのではないか。総じて和歌に詠まれる人の心というものは、もっと哀れなものであり、切ないものであってよいのではないか。

題知らず

藤原盛方朝臣

山の端におもひも入らじ世の中はとてもかくても有明の月
(新古今集・雑上一五〇六)

思い立って山に入るようなことはすまい。あの有明の月がまだ西の山際に入らないで輝いているように、出家など

しないでこの世に生きながらえることができるのだ……。これは、出家などすまいという気持ちで詠んだもので、こういう和歌も過去の日本の社会になればならないと思われる一首である。『新古今和歌集全評釈』にいわく、「この歌は、この俗世にはどのようなにも順応してゆけるのだと悟って、遁世を思い立つまいという心を有明の月に寄せて述べたもので、安易なまでに人々が出家遁世へと駆り立てられていた時代の人の詠としては、やや珍しいという感じを与える。しかし、多くの人々の現実の生活感情はむしろこれに近いものであったであらう。詩的精神の高揚は求むべくもない作ではあるが、現実感を認めてもよいと思ふ」と。「多くの人々の現実の生活感情」はこれに近いものであろうといい、この一首には「現実感」があるというの、よいと思う。詩的精神の高揚は求むべくもない、というのはどうであらうか。ここに掲げた短評から『全評釈』の著者の詩観のすべてをうかがうことは困難であるが、もしいわゆる「詩的精神」が主として「出家」の側から求められているものであるとすれば（そうでないかもしれないが）、それはその「出家」の反対の側からも求められてよいのではないかと思うのである。出家をとめる古川柳の句に「詩」を認めることが許されるなら、出家はすまいという新古今集の一首にも、それ相当の「詩」はあるのではないか。

題しらず

大僧正慈円

ひとかたに思ひとりしわが身にはなほ背かるる身を
いかにせん
(新古今集・雑下一八二五)

この一首も、古人には出家への道を前に進む気持ちと、あと戻りする気持ちとがあり、その両者が絶えず葛藤していた事実を、現代の読者が心得てはじめて理解できる歌である。

この歌の意味としては、『完本新古今和歌集』に「隠遁しようとして一途に思い込んだ心を取っては、まだその心にそわず反対しているこの身の方を、どうしたものであろうか」と言うのが正しい。古人はこういう場合、出家の道を進むか戻るかという気持ちの葛藤を「心」と「身」との対立矛盾としてとらえたのである。この一首は、さらに言えば、『新古今和歌集全註解』（石田吉貞）に「『心では、一ずにこの世が厭だと思ひ込んで捨てたのであるが、その心にはそむいて、未だ憂世に未練を残しているこの身をどうしようぞ』。心には一ずに世を捨てても身はまだ世に執着している事を嘆いたもの。美濃以下けれども、世をそむきたる上にも更に世が厭わしいが、何としたものかという様に解しているが、抄の『心は捨てゝも身はうき世のまじまりを捨て給はぬ事をよめる歌也』とあるに従うべきである」(傍

点原文) と言うとおり、古来容易に理解しがたい歌であった。本居宣長のような人でさえ、これを一度背いた世がさらに厭わしい意と思ひこんだのである。「なほ」は「さらに」ではなくて「依然として」であることを忘れて。すなわち『新古今集美濃の家づと』にいわく、「一かたにおもひとるとは、世をいとはしく思ふ心の、ひたぶるなるをいふ。猶そむかるゝは、そむきて出家せしうへにも、猶いとはしき也。一首の意は、もとよりひたぶるに世をいとひし身なれば、そむきたるうへにも、猶いとはしく思はるれば也。既にそむきたるうへなれば、此うへいかにともすべきかたなき也」と。この世に未練が残る、というのは、それが人間の真情だからであり、そこに詩歌の生まれるゆえんがあるのであるが、それはその人間の真情を否定する側でなくてその正反対の肯定する側に立たなければ、つい見逃されてしまいがちな事実であったのである。